



還暦同窓会



大阪人間科学大学教授

山田富美雄 (やまだ ふみお)

1980年、関西学院大学大学院文学研究科博士後期課程修了。1985年、関西鍼灸短期大学講師・助教授、大阪府立看護大学助教授・教授を経て現職。同大学健康心理学科長、大学院人間科学研究科長。専門は生理心理学、健康心理学。

高校の同窓会がゴールデンウィークのかかりに開かれた。私は当日、別の会があったので、遅れて参加することになった。予定の会場に入ったとたん、驚いた。じいさんだらけなのである。高校がSコース(理科系)だったので、出席者のほとんどが男性ということもあったが、全員同い歳。今年60のおじいさんである。そうなんだ。私も、じいさんで見られているんだ、と改めて気づかされた。それにしても、誰だかわからない。名刺を交換して、歓談。そのうちに、青春の日々を過ごした同窓生のあいつやこいつが目前のこの男だと同一視できるようになってきた。

二次会に入り、さらに話が盛り上がった。私を知るある人は、私が写真部の部長として、撮影会を主催したり、学内行事の記録係として動き回っていたこと、生徒会や部活の予算委員会で結構ハバをきかしていたことなどを思い出してくれた。写真部の仲間のA君は、埼玉で歯科医院を開業していて、東京同窓会の名幹事。サッカー部の人気者だったB君は、某歯科大の教授になって洒落た会話ができる大人に成長していた。会話が最もはずんだのは、写真部の副部長だったC君。大手食品メーカーを50歳過ぎに早期退職し、今はマンション経営をしつつ、地域で活躍している。ライカM3を片手に北海道を旅したすごいカメラマンだった彼が、子煩悩な普通のお父さんである。彼の娘さんは

某大学で開講している「生理心理学」の授業を受講した教え子だったことも判明。お互いの結婚式を撮影しあった仲である。

同窓生たちは、それなりの60歳の風貌をしつつ、多感な高校生の目で私をみつめ、口角泡を飛ばして当時の議論を吹っかけてくる。思想、信条、価値観、審美眼、といろんな議論をした。また会おう、次はいつ、東京で、盆明けに……と話が進み、とうとう金沢にいるD君に電話をかけて日程まで決めてしまった。

見た目はじいさん、心は高校生という名探偵コナンの逆を行く私たち写真部OBは、今試練の時を迎えている。そう、8月までに写真撮らなくてはならないのである。作品をつくらなくてしまったのである。

そういえば、高校生活は、写真部の部活で多くが占められていた。作品講習会のため、カメラを持ち歩き、撮影会に通った。

フィルムはもちろんモノクロ。コダックのトライXという高感度フィルムや、富士フィルムのネオパンSやFを缶入り長巻きで買い、カメラに装着できるよう36枚撮り分に切って、パトローネと呼ばれるフィルムケースに封入して使用した。取り終えたフィルムは即現像した。現像液はミクロファイン、時にD76増感現像液。暗室の薄青いライトのもとで現像具合を確認し、思いの時に酢酸で現像を停止。ハイドロキノンで定着して水洗い、そして乾燥。密着焼

きで絵柄を確認した後、暗室に籠もってキャビネ判に焼きつける。ほぼ毎週、壁に写真を貼りつけ講習会。意見は大概一致せず、物別れになるのだが、互いの感性の違いや美的なものへのこだわり、価値観の相違をこうした作業から学んだ。部室のあった物理準備室の先生も中に入って、ああだこうだと言いつつ日々だった。

気に入った写真は、4つ切りや全サイという大判に引き延ばす。これをベニヤ板と角材で手作りしたパネルに、水にぬれたまま貼り付け、ホチキスで固定。周囲に紙テープを張れば、パネル写真が完成。300コマ撮影したうちの1枚だけがここまで来るのである。

部分的に暗くしたい、あるいは明るく仕上げたいと思えば覆い焼きをするのが最低限の引き延ばし術であった。トリミングや細かな修正は少し専門的な技術。スポッティング筆を使ってフィルムの粒子を再現する技だけは相当磨いた。

このような写真部三昧の高校時代が、還暦同窓会によって呼び覚まされたのである。写真は紛れもない、私の青春そのものなのである。

そして今、この忙しい日々の中で、パネル写真を最低1枚作ろうというのである。

先日、ニコンのD7000という一眼デジカメを買った。その他にもカメラはある。デジタル写真編集ソフトやカラープリンタも用意した。足りないのは時間だけとなった。学会出張の折にも一眼デジカメを持参しようと思う。